

沖縄農業あれこれ

たい　ら　はる　お
平　良　治　男

今年は沖縄が本土復帰して25年の節目にあたり、昨年夏から去る5月15日の記念日ごろまでは、久々に安保の係わりから在沖米軍の基地問題で沖縄が全国的にも脚光を浴びたところである。

沖縄の自然条件の特徴は、海に閉ざされた島嶼であり島社会であること、それに亜熱帯であるということである。そこで、沖縄の農業を考える上で重要なのは、日照が強く温熱には恵まれてはいるものの、夏の干ばつ・台風はどう対処するかという問題である。

こうした気象条件のために、さとうきびは古くから沖縄の農業において基幹的な地位（農業粗生産額の約20%）を占め、歴史的にも気候風土に適した土地利用型の代表的な作物となっている。一方、製糖業は沖縄の農産加工業の中でも地域経済に対する最も波及効果（3.38倍）の大きい重要な産業であり、また数少ない移出産業という観点からも、沖縄の製造業の中では非常に重要な地位（工業総出荷額の約1割）を占めている。

しかし、沖縄におけるさとうきび生産等の現状は、ここ数年にわたる関係者の努力にも拘わらず、生産農家の高齢化、原料価格の低迷、他作物への転換に伴う作付規模の縮小等により、栽培面積の減少に歯止めがかけられず、このまま推移すれば糖業経営そのものが危機的状況に陥り緊急事態を招くのではないかと懸念されている。

こうした状況の打開には、如何にして面積拡大を図るかということで、緊急的な各種奨励事業の実践と農地の流動化、機械化の推進、輪作・間作等々による収益性の向上に努めながら、さとうきびと製糖業の潜在的な可能性について、関連産業への波及効果が如何に絶大であるかを啓蒙することが必要である。ま

た、バイオマス資源としても多面的位置づけで見直されており、ただ単に他作物との収益性の面だけでなく、さとうきび（製糖業）が沖縄の島嶼経済や持続的農業にとって、土・水・緑・エネルギー等々と生態系に係わる多様な意義と役割の重要性を通してイメージアップを図ることも糖業再建に必要であると思われる。

沖縄の農業粗生産額は、昭和48年の450億円から年々増加を続けていたが、昭和60年の1160億円をピークに停滞ないし減少をたどっており、かろうじて1000億円台を維持しているのが現状である。これは主に生産額の大きいさとうきび、野菜類の減少と花き類の停滞が大きく影響していると思われる。しかし、最近脚光を浴びているものとしては、肉用牛、葉たばこ、菊、マンゴウ、ニガウリ、サトイモなどの作目があげられる。

このように、沖縄では冬場の温暖な条件を活用して、種々雑多な作物を導入して多面的に栽培されるようになったが、その反面、生産農家はタイワンシロガシラ、ヒヨドリ、オオコウモリ、イノシシなどの鳥獣害、ドウガネブイブイ、マメハモグリバエ、カミキリムシ、レモントビハムシ、バナナゾウムシ、イモゾウムシ、アリモドキゾウムシ、パパイヤ奇形葉モザイク病などの病虫害、雑草害の防除に困難を極めているのが実状である。

この中でも特に被害が大きいのは、マメハモグリバエ（トマト、スイカ、トウガンなど）、レモントビハムシ（柑橘類なかでも在来のシークワシャー）、タイワンシロガシラ（野菜、果物の新芽）、バナナゾウムシなどの多発によるものである。

ところで、農村地域では産地直販店がどこでも見掛けられるようになり、土・日のドライブされる方々で活況を呈している。出来はじめのころは、新鮮、高品質、安いという産地の特徴が出ていたが、商売が上手になったせいか最近は都市の価格並みになってドライ

ブで買う魅力を失いつつあるように身受けられる。せっかくの機会だけに、消費者を引きつけるためにも所期の特徴が出せるよう種々

改善する必要があると思われる。

(沖縄県那覇市・日本分蜜糖工業会)